

速報展 阿方中屋遺跡4次調査

期間：令和3年12月4日～令和4年4月17日

はじめに

今治市教育委員会では、遺跡の発掘調査を実施しています。今回は発掘調査速報展として、
やよいじだいちゅうき
弥生時代中期（約2000年前）と古墳時代後期（約
あがたなかやいせき
1400年前）の遺跡である阿方中屋遺跡の4次調査
の成果を過去の調査成果と合わせて紹介します。

阿方中屋遺跡周辺の環境

阿方中屋遺跡は阿方地区の中央部や北西より
みなみすそ てきゅうりょうじょう
の近見山南麓の低丘陵上に立地しています。

周辺の丘陵上には古墳時代後期から終末期にかけての古墳が多数見つかっています。また、弥生時代中期の集落遺跡も周辺の丘陵上に多数分布しており、阿方地区は遺跡の分布密度が高い地域といえます。

これまでの歩み

1次調査

古墳時代後期の堅穴住居跡、
ほつててばらしたるものと どこう
掘立柱建物跡、土坑、ピットなどが
見つかりました。弥生時代中期の遺
物も出土しましたが、明確な遺構は
土坑1基のみで、その他の弥生時代
の遺構の検出は後の調査に委ねられました。



1次調査遺構面全景



2次調査第2水田面

2次調査

特筆すべき成果は時期が異なる上下2面の水田跡の発見です。いずれも、洪水による砂層に埋没していました。時期はいずれも古墳時代後期頃の可能性があります。水田埋没後、時期をおいて中世の集落が展開したことがわかりました。



3次調査第2遺構面全景

3次調査

弥生時代中期と古墳時代後期の集落が少なくとも1・3次調査区に広がっていたことが明らかになりました。また、古墳時代後期の遺構は2時期に分かれ、2次調査で発見された2面の水田はそれぞれの時期に営まれたものかもしれません。

4次調査の成果

阿方中屋遺跡4次調査では、掘立柱建物、カマド、土器溜まり等の遺構約200基を検出しました。遺構の時代はそのほとんどが古墳時代後期（約1400年前）のものと考えられます。弥生時代中期（約2000年前）の遺物が多数出土していますが、明確な遺構からの出土はありませんでした。

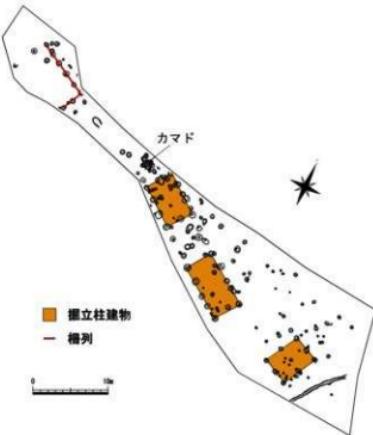
調査の概要

場所：今治市阿方

期間：令和元年1月14日

～令和2年9月11日

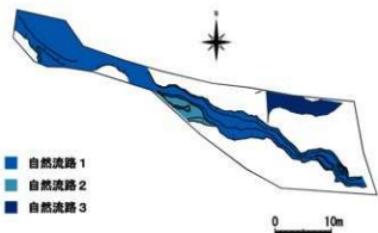
面積：777m²



4次調査区遺構面平面図

自然流路

自然流路は調査区のはば真ん中を東西方向に横断するように流れていたことがわかりました。また、自然流路内からは弥生時代中期後葉の遺物が多数出土しており、少なくともその頃には流路として機能していたと考えられます。また、後でも紹介するように古墳時代後期の集落はこの自然流路が長い年月をかけて埋没後に形成されました。



自然流路平面図



自然流路

掘立柱建物

4次調査区では掘立柱建物を3棟検出しました。いずれも、これまでの調査で検出した建物と向きがそろっています。現在の用水用の小川を挟んで南側の調査区で発見された集落が4次調査区まで広がっていたと考えられます。



掘立柱建物検出状況

カマド

カマドの上部構造が崩落したと考えられる黄色土が堆積しており、その下からは被熱により赤色化した焼土が検出されました。

通常、カマドは住居等の建物内に付設されることが多いのですが、4次調査区では堅穴住居の検出はありません。そのため、このカマドは調査区外に柱が並ぶ、掘立柱建物内に付設されたもののが可能性があります。



カマド検出状況



焼土検出状況

土器溜まり

調査区の東端で検出した土器溜まりです。古墳時代後期の須恵器が多数と獸骨片が一緒に出土しました。

検出場所は他よりもやや窪んだような地形になっていました。古墳時代後期にはその窪地を利用して土器やゴミを廃棄していたと考えられます。



土器溜まり検出状況



獸骨検出状況

まとめ

弥生時代中期と古墳時代後期の阿方中屋遺跡

4次調査では弥生時代の遺構は未検出ですが、3次調査で竪穴住居等が発見されています。弥生時代中期には南側に集落があり、その北側に河川（自然流路）が流れていた景観が復元できます。

そして、河川が少しずつ埋没ていき、その上に古墳時代後期の集落が形成されました。

4次調査区で検出した建物は掘立柱建物のみで、竪穴住居は現在の小川を挟んで南側の調査区でしか見つかっていません。集落内でも区域によって建てられる建物が異なっていたと考えられます。また、集落の人々は2次調査区で検出した水田で稲作をしていたようです。

